

小春

泉鏡花作

一

代々木に訪ねる人があつて、其處へ行くのに、甲武線の電車に乗つたが、午餉を済まして間も無い、硝子窓は熱いばかりの好い天氣、巻蓆を喫むと唇が燥いで逆上せるほどの小六月。

大きに飽倦むまで降つた年で、こんな日和は數へるばかり、殊には出不精、近頃一向に歩行かぬ。

好い折から、此の序に、と思ふと、冬も半ばの日の短かさ。其の知己の家に用達して歸途にすると、枯枝に霜を散らす、夕月の曠野は凧と成らう。

行きがけに、と其處で千駄ヶ谷で電車を下りた。停車場を出ると、彼處に代々木の方へ突切る野原がある。草は眞白に枯れたが、其も羊の毛を敷いたやうに、ほか／＼と暖かさうで、且つ雪路を畝つた

風情の、往來の痕にも、下へ蒸氣でも通はすらしく
快く日が當つたが・・・去年だつたか八月の
はじめ、極暑の節、此處を越して、ぢり／＼と足を
焼かれた事がある。

思出しても目が眩む。

固より、急ぐのでは無いから、些と日蔭ではあつ
たが、向つて土堀、石垣など、小店も開けた、場末
の屋敷町らしいのを通つて、一廻りして徳川家の地
内を抜けた。

まだ眞晝間の日當りで、構内の竹藪も、ほつかり
乾いて寒さうな影も無く、蒔棄てたらしい葉の小さ
な大根畠も、手を入れた牡丹の庭より長閑である。

晩方、表門がぴつたりと、城の如く閉つてからも、
荷車輓などは、勝手に開けて、から／＼と行抜けを
すると聞く。

然れば、門際の交番にも、茶を煮る湯氣が颯と上

つて、葉の落盡した櫻の枝も、ふつくりと柔い。

處へ、女學生が前途から一人來た。其のけば／＼しいりボンを、腦上に俄然と聳やかした工合は、赤蜻蛉が向顛卷をした形であつた。

さて、此に配するには、蠅螂のやうな半外套でなければ成らぬ。

野には龍膽、草もみぢ、嫁菜のおくれ咲も尚だあらう。・・・・・淺黄、朱鷺色、紅鹿子、娘に手絡はすくな少く成つた。

地内を出ると、街道である。

古着屋に、股引の懸つたのも、魚屋に秋刀魚が瘦せて、鮭の切身の乾いたのも、淺間な葉茶屋の大な茶壺に、一杯の日が當つて、屋根は榎の下蔭に、澁を塗つたやうに落葉の溢れ敷いたのも、軒下に轆轤を廻す。・・・・・木地屋が木屑の芬と立つ木の匂も、椿の下の地藏堂も、成程、巢鴨の兄弟分。甲州路へ振出しの、双六を行く人通り、遊ぶやうでも急がい。

其處で横路を傍へ切れた。

生垣の揃つた片側が屋敷構、片側が藁葺の凸凹と
した百姓家で・・・新開らしい。屋敷側の四五
軒目に、立派な瀬戸の門札に竝べて、冠木門の柱に
懸札あり、墨も黒々として曰く――自園の製茶
賣捌き候――は面白ひ。

密と覗くと、眞新しい、四枚の格子戸、廂が廣く、
奥が深い。其の石を敷詰めた玄關の格子戸の傍、障
子の白い出窓の下に、ピカ／＼と母衣の光る乳母車
が据ゑてあつた。

「ものも、案内も。」

「いや、表に案内がある、案内とは誰ぞ。」

と云ふ調子か。

「はッ、御免下し置かれまするやうに、」

「何ぢや、何ものぢやの、」

とあるか。

此處へ買ひに来るものと賣る人の、應對と其の様

子^すは、一^{だん}段の観^みもの、聞^ききものであらう。
時^{とき}に、些^ちと道草^{みちぐさ}が過^すぎる。

「もし一寸伺ひますが。」

「はい、はい。」

通合はせた人物は、襟の掛つた半纏、むく／＼と着膨れて、帽子は被らず、紺足袋で草履穿。衣服の皺にも一杯の日を浴びて、額も赤いほど暖かさうなが、背伸びをして、小高い丘に、牛の群居るのを視めたり、疎な生垣から、畑打つ漢に聲懸けたり、所在ない風でも、呑氣らしく、のそ／＼とぶらついて居る様子が、此の邊の地主とも言ひさうで、身の重いのに、口は軽い。

「此を入つて抜けられますか。」

「突當りですよ、あの森でな、はい、何處へ行かれます。」と頷くやうにして聞いてくれる。

「代々木へ参るにや参るんですが、途中を、何處となく歩行いて居ます。でも、突當りぢや詰りませんね。」

「は、あ、散歩、いや、結構なお天気でな。」

「眞個の小春日ですね。・・・お、其の藁

葺屋根の上の方に見えます、あの、薄青い柵は、停車場のやうですが、何處のでせう。」

「はあ、」

と濃い太い眉で、

「ありや蹈切で、代々木の蹈切と言ひます

よ．．．．俗にな。」と最一つ頷いて云ふ。

俗に．．．．と聞くも可懐しい。土地に久しい狸であらう、顔色も何うやら肖て居た。

やがて、堤防を切つて、其の蹈切を通ると、一度来て、最う其處からは心覚えがある。だふ／＼とした洋服で、頬の伸びした、番屋の爺様の顔も相變らず。．．．．

萌葱の旗を、ト窗掛けのやうに引掛けて、大な目金で、新聞の繪のある處。

下りると、地面がゆつたり弛んで、晝寐をして居さうな、明い、暖い窪地の小さな谷で。

それを又たら／＼上りで、突當りに砂利を敷いた、
廣いが、轍の條の無い、一帶の森の其の静かさ。

振り返つて左の方は、電車路の堤防に添つて、枯野
と杉の林である。．．．．今來た方は、街道の立
樹、植込の庭、遙々と新宿あたりの銀杏の梢、一目
の見霽。緑は沈み、淺黄は浮き、朱は霞み、紅は燃
えて、透通るやうな蒼空にちら／＼と雲が散る。雲
が、日の光に、恰も白銀の如く輝いて、颯と七彩の
木の葉に射すのを、薄りと霧が包んで、淡く人家の
屋根を繰る。

が、其の下に往來ふ人は、地の上を、林の根の參
差と鋭く露ばむ中を忙しい。小僧も走る、旅商人、
荷車が過る、馬が喘ぐ、腕車も駈ける、輪は光
る。．．．．

堤防一つ離れた此方へ、音も聲も響かぬけれども、
人と馬と車と續くと、軽い埃が、ばつと立つ。其が、
古金欄のやうな木立の裏、淀りとした市中の塵の煤
びた中へ、天の一方に靡いて行く。

待て、待て、人事では無い。

些と急いで右へ。新築の家、空屋の門、と足許に
水の流るゝ低い崖に添うて歩行き出す。其中に、曲
角に、其の水の小さな池のやうに成つた、堰らしい
縁に、誰かゝ束ねて忘れた風情に、一箇所、嫁菜の、
紫の俤のやうに咲残つて居るのを見た。

水も風情である・・・後で聞くと、玉川の露
が絲のやうに、あのきれいな草森の下を貫ぬき留め
て灌ぐとか・・・浅いが、浅く澄切つて、あり
とも見えず、無いでもなく、別に流れようとも思は
ぬやうに、たゞちら／＼と、冷たさ清さを、野に湛
へて、月の鏡と成るのを待つ。

可憐い、其の水に、化粧し顔に、影をまかせた嫁
菜の花は、然も花片がくるりと捲いた、細い管に小
さな露持つ、筒咲とか云ふのであつた。

手を伸ばすと、水を横切つて容易く届く・・・
三本ばかり、・・・あゝ、後が寂しい、武蔵野

に僅わづかに残のこる紫むらさは、繪ゑの具ぐのやうに手ての中なかへ。

今年ばかりと云ふではないが、果敢いほど、うら
 枯れて、樹々の梢こそ、冷い錦に、羅の被衣した視
 めはあるが、草と云ふ草の中に、色のあるのは、道
 すがら此の一叢の薄紫のみ。

秋咲の鼓草も、他の嫁菜も、薊も、星月夜も、む
 ら／＼と幻の小さな煙。で、花野を惜んで包むだ眞
 綿が、寸断に切れて、ぱつと散亂れて、やがては霜
 とゝもに消えさうであつた。

手折つた嫁菜が友ほし氣に。

餘り便なさうに胸へ撓々と絶るから、此の邊は
 薄も茹られて、尾花の飛んだ殘餘も無いが、先方の
 練兵場について、あの遙々とした田圃へ掛ると、一
 面の薄原で、眞赭の中に、紺青の輝くばかりな狩衣
 着けた龍膽が、薄の一穂に一本つつ、透通るまで咲
 いて居たのを覚えて居る。

其も紫、袴と振袖、此の嫁菜の花添はさうよ。

凡そ志す友を訪ねて、其の留守を、好都合、と云ふ事はつひぞ無い。が、此の時ばかりは満更にも思はなかつた。

あの田圃の方へ、漫に心が急いだから、尤も立寄つた家も、道順で、其も可し。

最う代々木だと、市のものを珍らしさうに、熱い茶一つ、と言はれたのを、上框で辞退して、すぐに練兵場の方へ向つたのである。

其處等で、四五人の往來に逢つた。づつと來る途中、人通りは、丘を越して、堤防を隔て、視めるばかりで、まさしく行逢ひ、擦違つたのは殆ど少い。恰もあか／＼と日の光を湛へた日南の大海を一人で徒渉して居るやうで、あの渺々とした練兵場を、横に視て行く時は、尚其の感が深かつた。廂の掛菜の春めくのも、さすがに冬の營で、日中も鼯の覗きさうな。

あゝ、はた／＼と凄すさましく白旗しらはたが空そらにはためく、と
見ると蒼空あをぞらの雲くもを射いて、鷹たかの羽はの征矢そや一條ひとすぢ、グザと
眞黒まっくろな白晝まひるの星ほしを裏搔うらがくばかり貫つひぬいて、鏃やじりが踊をどる、
的まとが戦をくく・・・大弓場だいきうばの看板かんばんが、遙はるかに市まちの方ほうへ
翻ひるがへるのであつた。

其その角かどは、大河おほかはの底そこの乾かわいたやうな、廣ひろい道路だうろで、
新宿しんじゆくまで、づつと行く筈はず。

左ひだりの細路ほそみちは、と見みると、空そらの風かぜを忘わすれたほどな、
日南ひなたの田圃たんぼ、枯かれた尾花をばなは、暖あたい霧きりを吐はいて、大根だいこん
畠たけの緑みどりの上うへを、浮ういて漾たぐよふ。彼處かしこに、其處そこに、ちら
／＼と細ほそく、此處こゝにむら／＼と流ながれて、其それが、あの
逃水にげみづの俵おもかげだつた。

其方そなたにこそ。

と、ほか／＼とある路傍みちばたの藁わらを、ふつくり踏ふんで、
やがて、尾花をばなに袖摺そでする姿すがたと成なつて、葉はもしどろに、
根ねもたゞあからさまな中なかを、彼方あつち此方こち。ものゝ二三
町ちやう、田たの畔くろそひ添そひに探さがしたが、雨勝あめがちな年としの育そだちが悪わるいか、
成程なるほど、最もう蕃椒たうがらしも、俵たはらの中なかへかさ／＼と入はいつて、二ふた

ツ三ツ溢れたのが、唐臼の土間に落ちて居ると、鶏
が見て吃驚もしさうな時節。欲い龍膽は、花の一本、
葉の一片も見當らぬ。

嫁菜の花も日に白ける。

千駄谷から歩行通しで、額も汗ばむ、――些
と休まう。

直き足許の田の畔を、四隅に仕切つて、稻藁が束
ねてあつた。

此の蒲團を見てさへ、手足が和らぐのであつたが、
乾いても水田のあととなり、暖さも暖い。雲は美しい
が、此の頃に又雨であらう、夥しい羽蟲が、ばら／
＼と胡麻を飛ばして、羽で渦巻く。．．．．．蚋も
また少くない。

片側は、雑木林で、陰々とした小高い丘の寒さう
なが、路と其の丘との間が、目の届くだけ長く畝つ
た、竹の埒を結つた馬場で、先に此の仕切は無かつ

たが、此この節結せつゆひめく繰おらしたものと思おもふ。其處そこは濕しけな
い。

後あとで返かへして置おかうもの。

「藁束わらたばひと一つ借しやく用よう申まをす。」

で、尖さきを取とつて、ざわ／＼と引ひいて、蟲むしを、袖そでで
拂はらつて、枯尾花かれをばなを投なげた。

四

埒の切目の、丁度出入口。少し路を下つて、悠如と腰を掛けて、蒼空と太陽の間へ手笠を翳せば、あぶられて眩いやう。……社の森へ瞳を映すと、霧もかゝらず、底澄むで、晝の月が斜であつた。

浮世を離れた趣で、一人、何やら染々と嫁菜の花が瞻らるゝ。

其處に、眞向に向合つた、茅薄の苧株に、木の葉が乾びついて、ばら／＼とある中へ、蝦蟆が罷出でたと云ふ詠へた形に、古靴一つ片一方。

尖が拉げて、甲がぶくりと、ばく／＼口が裂けて、海鼠が反を打つたやうにポカリとあつた。が、何の皮やら鯨子張つて、やがて龜裂が入つて缺けさうに見える。普通よりは稍大形なのが、尚ほ目に着く。

餘り面と向つて居るので、氣にすると無く凝と視めた。

爾時、はじめは、腰に敷いた藁束が、他愛なく中崩れがする、其の響きが身體に傳はつて、自分の方が揺れるのだ、と思つた。手にした嫁菜が幽に震へて。

見直すと矢張動く、靴の方が動く。．．．ぴく／＼と皮を戦かして、蚯蚓が干乾びて纏ひついたり見える、あのだ／＼の紐を、ひくり／＼と遣る。

風は些とも無かつた。蟲の羽音も聞えぬ。

其の動くのが、稍大きく成つて、うら枯の野に一處、苧株の根を、不状な、黒奴の脣めいた爪尖が、右へ、一寸、ぐいと曲んで、左へ一寸、ぐるりと廻る。

「何だ、」

と思はず聲を出した。が、然まで恐れたのでは無い。

「靴が……何だ。」

たとひ其の運動するのが僻目で無くても、たかゞ靴で、屑屋が、駈出したほどにも思はぬ。

と思ふ下から、偶と瓜の中に烏蛇が宿つた、と云ふ昔の物語に心着いて、悚然として衝と藁束を立つて退つた。

得たりと一步、むつくりと出て、ばかりと近づくのが、烏がちよんと歩行いたやう。

とぐるを巻いて居はせぬか。

固より長靴では無い。上げた奴の然も口が開いて。―― 恚う、逃構で高くから覗くと、かびの生えた踵が赤い。其が蛇の舌ではなく、ぶくりとした唯裏皮で、蟲が潜めばとて爪尖の方であるが、其だとて精々が、蛙か蝗で。しかしそんな事で、此はびくりとも動くのではない。

地震の兆が。

否、否、其は又餘り大袈裟過ぎる。

ト古靴は、こびりついた泥が、蠨螺ともある裏を
見せて、ばかりと仰向いて、衝と藁束へ乗らうと
したが、じりりと退つて、苧株にトンと留まつた。
と途端にかたりと云ふ。

人は、と戀しく伸上ると、近くの屋根は、あの日
當りに、軒を傳ふ猫も見えぬ。遠方に、處々、大根
を抜いて白々と積んだ處は、流があらう、が、鳥も
鳴かぬ。

背後へ離れた畠の中に、唯一人、稲束の陰に見え
隠れで、鎌を使ふ婦の姿が、小さく遠く眺められた。

其の兒なのであらう。遙々と細路續きの、竹と尾
花で畝つて、よれて、搦まるあたり、路の眞中に藁
を敷いて、其の上に、ちよこなんと坐つて、寂しさ
うに、母親の働きぶりを凝と視めて居るのがあつた。

ー 人通りの少ないのは其でも知れる。馬や、
車は、来て雛を驚かさぬ、で、親鳥も、巢から銜へ
出して、餌拾ふ間を、路の中に待たせて置くので、
其の兩方さへ、距離が大分ある。此方と、小兒と、

其の母と、三ツに離れて同じ間遠さ。

差當り目の前の不思議な思は分たれない。

其のまゝも不氣味なり、餘りと云へば駈出すも慌し、と睨めくらで居るも可いが、すたと飛んで、頬邊などへ喰つきはしはせぬか。

生憎頬當に成る頤髯も持合はさず、と分別がありさうで、其の時棒のやうに立窘む。

處へ・・・蒼空の代々木の方から、車が一臺、もと来た路の、尾花の切れ目へ、晃々と輝く輻。

五

眞個ほんとうに驚おどろいた、人ひとかと思おもふと、犬いぬが乗のつて居ゐるではないか。蹴けこ込みの上うへで、澄すまして、ぬつと其その長ながい耳みみで、狛こまを極きめてるには吃びつくり驚おどろした。

今いま、人戀ひとこひしくニみまはす處ところへ、俾まが見みえたのは少すくなからぬ心こころ頼たのみ。で、輻やばねの光ひかりを暗やみ夜の提ちやうちん灯ひきよ。引ひきよ寄せたいほどに待まつ處ところへ、曳ひいた人間にんげんに變かはりは無ないが、客きやくはと思おもふ暇ひまもなかつた。ごむ輪わで、高たか臺だいの立りつ派ぱな乗物のりもの。燃もえ立つばかりな蹴けこ込みの敷しき毛げに、前まへ脚あしを立て、斜しやに構かまへて、伏ふせ姫ひめの婿むこが馬車ばしやで來きた體ていの、大おほき西せい洋やう犬いぬを一ひと目め見みて驚おどろいた。

犬いぬがまた何なんとしたか、來きたと思おもふと蹴けこ込みから、ストーと下おりて、長ながい鼻頭はなづらを衝つと比この馬場ばばの中なかへ突つ込こむや否いなや、背せを畝うねつて、後あと退じりをしながら、細路ほそみちを斜はす違ちがひに、尻尾しつぽでゆら／＼、尾花おぼなを揺ゆつて、眞黄まつきいろ色いろな目めを刮くわつと輝かかしながら、うゝ、うゝ、うゝ、――唸うなるやうに吠ほえたのである。

勢、車夫も不意を食つて、迂るごむ輪に、胸を
反らして輯を留めた。

車夫は、顯の短い、大な口のまはりに笑皺の寄つ
た、やがて六十ぐらゐの親仁。これで車を引くは悲
惨のやうでも、樂に仕事をすると思えて、眉の開い
た廣い額に、一番しやんと來い、と横つちよに一ツ
捺つた平作結。元氣も可さうな血色の赤ら顔に汗
ばんだ、半纏にむつくりと綿が入つたので、背を圓
く、雀のお宿へ行きさうな柔和な人體。

「よい。」

と驚いた聲を懸けて、

「何するだね、この和郎は。」と犬を叱つたが、

邪慳でない。

其處で言を交はしたのであつた。――

「はあ、これ、人ツ子さ見えねえ、こんな處だで、
然うでがせう、希有な事に思はしつたんべい。狐さ
馬に乗せたてますがね。まだ其の方があり來りだあ

よ。

何^{なに}ね

これ！」

と下^{した}を向^むいて、

「何を吠^ほえるだい、これ、旦那^{だんな}と私^{わし}い話^{はな}しとるでねえか。何が怪^{あやし}いだや。あ、静^{しづ}まれつてば静^{しづ}まれさ。

あれ、まだ、吠^ほえるだ、此^この和^わ郎^ろは——」

と片^{かた}手^てで扁^{ひら}平^{つた}い頭^{あたま}をすぼり。巖^{がん}乘^{ちやう}な掌^{てのひら}で蓋^{ふた}をするやうに壓^おしたが、大^{おほ}な耳^{みみ}をぶる／＼と振^ふつて、目^めを光^{ひか}らして矢^や張^{はり}呻^{うな}る。うゝ、と顛^{あこ}を草^{くさ}につけて、地^ぢを摺^するばかり、馬^ば場^ばを狙^{ねら}つて。

思^{おも}ひ當^{あた}る事^{こと}が靦^{てきめん}面^{めん}にある。

「好^いい犬^{いぬ}だね、御^ご主^{しゆ}人^{じん}のかい。」

「御^ご主^{しゆ}人^{じん}ぢやありませんねえがね、矢^や張^{はり}りお出^で入^{いり}先^{さき}から頼^{たの}まれて來^きましたが。……・・・・・魏^{いつ}町^{まち}番^{ばん}町^{ちやう}のお邸^{やしき}でがんすよ。豪^えら學^{がく}者^{しや}の先^{せん}生^{せい}様^{さま}でね。」

と感^{かん}心^{しん}をしたやうな口^{くち}振^{ぶり}。

「遠^{とほ}いな、番^{ばん}町^{ちやう}から曳^ひいて來^きたのか。」

「お前^{まへ}様^{さま}、王^{わう}子^じからだよ。王^{わう}子^じから來^きてね、これから駒^{こま}場^ばの農^{のう}學^{がく}ちゆうだ、豪^{えら}い學^{がく}校^{かう}へ連^つれて行^いくで

「がんですよ。……あれ、何を吠えるだよ、まだ、
呻つて、和郎。」

「尾花と、森と、田圃を見る目に、王子から駒場と
は、聞くも遙かに思はるゝ。」

「王子から駒場へ、」
「とつい口出た。」

「そりや、随分ある。」

「親仁は吞氣らしく揖棒を腕へ掛けて、車を仰向け
に引傾げ、」

「造作ありましねえだよ。瀧の川から團子坂へ抜
けて、新宿と出て、のつそら／＼遣るだもの。好え

「天気でがんです。」

「と目皺で其處等を―― 枯野の草も柔い日南の

皺。」

「で、づつと犬を乗せて来たのかね。」

「と何故か尋ねて見たかつた。」

「否、直き後の町場から乗つけただよ。此がは、

「お前様ね。」

と揖棒かちぼうの中から、足許あしもとの犬いぬの背せを覗のぞく、と吠ほえる
氣競きほひが艶つやに出でて、茶ちやの斑ぶちの毛竝けなみがたら／＼、弓ゆみにす
つと背せを反そらして、まだ吠止ほえやまない。

耳みみの大おほきく垂たれた、其その橢圓形だえんけいの長ながい鼻頭はなづらと向合むきあ
つて、靴くつの尖さきがポカリとある。や、今いまの間まに又また其方そつち
を向むいた。

「此これがは、」

と――まだ靴くつの其その一件けんを話はなす間まが無なかつたので、何も知らぬ――親おやぢ仁には、ゆつたりと言いひつゞ續つける。「病びやうき氣きをして居ゐたゞとね。其そこ處こで、王わうじ子のし獸けだもの病びやうき院いんさ入いれてあつた、云いひます。

其それが、はい、恚かうして恢な復ほつた處ところを、此これが御ご主しゆ人じんのお友とも達だちが借かさつしやるだよ。借かりて、其そのの駒こま場ばの農のう學がく校かうに出でて居ゐさつしやる其そののお友とも達だちが、矢やつば張ばり此これが御ご主しゆ人じんと同じ豪おなら學がく者しやの先せん生せい様さまで、何なにか、はい、試し験けんに、可え牝めすさ當あてがつて、獵かり犬いぬの素す晴ばらしい小こ兒どもさ拵こさえる。ちよつくらね、其そののお婿むこ様さまに連つれて行いくでがんす。

路みちも強えらとありますで、病びやうき院いんから乗のつけるつもりで車くるま曳ひいて行いつただがね、人にん間げんが曳ひくで遠ゑん慮りよするだ、可か愛はいいもんだあ、何なんとしても乗のりましねえだよ。

鎖くさりい揖かぢ棒ぼうに取と着つけて、がら／＼驅ひ出きだすと、前さきへ立た

つて、ぐん／＼曳くだ。車はひとりでに、迂ります
だよ。軽いだあ、お前様。私らが反對に乗つてるや
うだね。其のかはり、此がは、一一生懸命に、力を
入れて曳くでがんす。

今日、雇はれて駄賃さ頂くだもの。此の方が、お
客様で、威張つて可えだものを、老年だと思つて、
愠はつてくれるでねえか。

けれども、病氣上りだあ、我勢に遠路をするだけ
も強かんべい。力出して車曳くでねえ。氣だけで澤
山だ、や、和郎てえましてもな、此のお前様、可愛
げな團栗目して、此方さ見るはかりで、矢張り、え
いさあ　ー　曳くでがんす。

煩ひ揚句に其ではなんねえ。人が見るで遠慮する
なら、最う可え。見せえ、誰も居ねえ、そら、枯れ
た薄と大根畠だ。せめて此の丁場一つ練兵場の馬場
の間だけでも乗つてくんろ。でねえと、賃銭を出さし
つた旦那様に濟まねえや、やあ、私が氣休めにも、
ちよつくら乗らせえ、とね、見さつせえまし、

と、もそりと緩く、日に向いて、其の空ばかり風の煽つ、大弓の旗を高く見上げた。

「あれ、彼處へ来た時だ。頭撫でて頼むやうに言つたれば、合点したかの、のつこり蹴込へ入りましけ……其でも遠慮勝に、へい、鼻頭外へ出して、氣術なさうに、固く成つて、ちよこなんとして居たでがんです。

解めた、私。

此處さ、お前様居さつせえたもんだで、吃驚して飛下りたに違えごとござりましたねえ。

可愛いもんだあね、

と車ごと横に成るまで、凭れるやうにして、ごつ／＼した手で、柔しく犬の頭を撫でる。と、ぞく／＼嬉しがつて縮むやうな形をして、うゝ……を一寸留めて、間伸びた顚で、親仁の股引を、ふつふと擦る。

「そうれ、」

と莞爾、頤の皺を揉くちやな笑顔に成つて、

「其の通りだーお前様に極りが悪いで、俵からスットンと下りたばつかしでねえ。爺が是非と云ふで、乗ったゞね、私のが心ぢやねえとつて、申譯に呻つたんべい。なあ、」

と又撫でて遣つて、

「ほれ、見さつせえ、此が心う汲んで、私が口で圖星と當てたれば、料簡の通つた處で、鳴留むだあもの、やあ、可愛い和郎な。」

歸つて、へい、茶あ飲んで婆様に聞かせべいよ。

病氣上りも厭はねえで、手助けに、汗掻いて、車のさき綱曳いてくれた、これ／＼と話したら、死んだ悴の事、又言出して泣えべいがな。

私らが悴は、お前様、兵隊さんに成つて怪我で押死ましたゞ。戦で、手柄したでねえけれど・・・些とや少とは、お國の奉公したちうで、世間で愼はつてくれさつしやる。

犬までが優しいだよ。はあ、何と云ふ結構なお天氣でがんせうな。」

ふと差俯向く、と靴は寂として居た。動かぬのが、
前刻より一層凄かつたが、言ひそびれた次手に、親
仁に其の話はしまいと思つた。

而して、ほろりとした。可厭な、男の癖に――
あらず、手にした嫁菜が優しかつたのである。

【完】